

早稲田大学 社会科学部 英語 講評

出題形式	マーク式
試験時間	90分
特徴・その他	<p>大問5題は昨年通り。昨年に比べて正誤問題はやや難しくなった。難しさが年々増していくようだ。Ⅱは3年前に会話文問題がなくなり、読解形式の空所補充問題となったが、今年もそれが引き継がれた形だ。当初よりやさしくなっている印象だ。法学部やスポーツ科学部とは違い、毎年設問形式が変更されるわけではないので、一度変更すれば当分は変わらないのが社会科学部と言えるだろう。読解問題は例年社会科学系のテーマが中心。ここ数年テーマの幅が広がった感じだったが、今年はまだ社会科学系のテーマに絞られた。下線部の意味を問う問題は誰も知らない表現を問うものが多かった。類推力が試されると言えるだろう。社会科学部に特有の推論、infer 問題が今年も含まれていた。Vの内容一致問題は結構難しかった。どこに書かれているかわかりにくい、本文とは微妙に言っていることが違うなど、正解を絞るのが大変だ。早稲田大学のほとんどの学部がそうであるように、社会科学部も英語での情報処理能力の速さを見ていると言えそう。全体的には、分量、難易度とも昨年並みと言える。全体として、7割程度は目標としたい(実際の合格最低点は6割台後半であろう)。</p>

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
Ⅰ	正誤問題	<p>昨年のやや解きやすかったので、今年のこの問題はかなり難しいと感じられた。NO ERROR は例年通り2つ。人間科学部もそうだが、動詞に関連した部分が正解のことが多い。ポイントを挙げると、essential の後ろは to 不定詞でいいのか、public は形容詞、関係代名詞の節が完全文ではいけない、at office で意味を成すか、than があれば前には比較級が必要、gradual は形容詞、構造上 tearing は tore と動詞にしなければならない、in which では先行詞が不明だし called の語法も成り立たない、あたりがポイント。NO ERROR のところは当然すべて正しいわけだが、model of ～と model for ～の違いがわかるであろうか？ 前者は「～の模型」、後者は「～の模範」の意味に成りうる。正確に分析しようとするとなんでもない知識が必要となる。ここはあまり時間をかけずに、半分程度の正解でいいと割り切って、いかに読解問題に時間を割けるかを考えたほうがいだろう。</p>	やや難
Ⅱ	読解問題	<p>今年も会話文問題は出なかった。この大問が始まってから徐々に解きやすくなっている印象がある。どうも熟語の知識が狙われる比重が高いようだ。今年も switch to ～「～に切り替える」、after all「何しろ」、due to ～「～のために」、still less ～「ましてや～ない」、break ～ down「～を分析する」、increase in value「価値が増す」と10のうち6つがそうである。選択肢は結構工夫されている。1は turn to ～「～に変わる」や convert to ～「～に移行する」ではいけない。英語からフランス語に話す言語を切り替えるわけだ。4は後ろに to を取る選択肢は多いが、意外と simply という副詞がポイント。7は it is ～ that …の構文で一番使えそうもないのが telling だが、これが正解。「おのずと表わす」の意味がある。10は正解選択肢でくすくすと笑えば読めているということになる。ここは得点源と言えるような大問となってきたと言える。ここは今後熟語勝負となるかもしれない。</p>	標準

番号	出題内容	コメント	難易度
Ⅲ	読解問題	分量は昨年そのままだが、レベルはやや下がったか。下線部の意味を問う問題は難単語や難熟語が狙われるのが基本。ここは4つのうち3つが難しい表現。1はBecauseの因果関係、2はin additionの添加、4はpack up and find another jobとなっているので、時間的順序を表すことができるandをヒントにする。「pack upしそして他の仕事を見つける」となればpack upはどういう意味か？ 内容一致問題と本文の要旨を選ばせる問題は社会科学部としてはそれほど悩ましいものではなかった。a complex problem with no easy solutions「簡単な解決策のない複雑な問題」というのはいかにも無難で、まさに評論文の要旨となりそうな選択肢だ。例年と違い、ここも高得点が狙えそうな大問だ。	標準
Ⅳ	読解問題	分量は増えたが、難易度は昨年並みと言えそうだ。とにかく社会科学系がテーマ。下線部の意味を問う問題は前後の内容から判断するタイプであった。たとえば、shirk fromは難熟語で、前後から類推するタイプ。ここは「抽象→具象」を利用するといいい。 ~ <u>the government must not shirk from these stark demographic prospects.</u> <u>It must come up with a plan</u> … 最初の文を具体化したのが下の文ではないかと考え、must not shirk from=must come up withの図式が成り立つと考えてみる。the demographic trendとefforts in this areaはどこを受けているかを問うている。文脈把握力ということになりそうだ。ちなみに、thisは比較的近場を受けやすいので、下線部の近くを探すのがよさそうだ。4のような内容一致問題はとにかく選択肢が多いので、本文を読む前に固有名詞や数字、時や場所を示す表現など、特徴的な語句を押さえてから読み進めるようにしよう。該当箇所を探すのに時間がかかってしまって焦ってしまったらまずいからだ。5は要旨を問うもの。人口減少と高齢化はどうしても入っていないといけない。当たり前だが、1文1文だけではなく、本文全体を俯瞰する力も問われている。	標準
Ⅴ	読解問題	専門家と一般市民の関係を問う社会科学系の読解問題。分量は増えたが、レベルは昨年並みであろう。内容一致問題は他の大問よりここはかなり難しかった。悩ましい選択肢がいくつかあり、全問正解はかなり厳しい。邪道だが、選択肢にallやnobody、completely、onlyなどの極端な意味の語が含まれていたら、不正解である可能性が高いとよく言われる。ここはonlyやnoがあるので、不適切な選択肢として一応後回しにするのも一つの手だ。hは以下のようにになっている。第3段落第1文(This relationship …)が該当箇所だ。 This relationship between <u>experts and citizens</u> rests on a foundation of <u>mutual respect and trust.</u> h. It is important that <u>citizens and experts</u> believe in and show respect for one another. mutualがone another、trustはbelieve inという感じなのであろう。このように対応させて見ていくと、正解選択肢を見抜くコツみたいなものが養われると言えよう。1～5の下線部の意味を問う問題は2を除いて前後関係から類推する問題だ。たとえばby defaultはA rather than BのAにあるので、Bのby designと反意表現なのではないかと考える。they get a hearingは少し前のlikewise「同様に」を利用するなど、いろいろ工夫していくといい。何か手がかりがないかと本文を必死に探す姿勢が重要となる。推論、infer問題は社会科学部が毎年のように出題する設問。あくまで「推論」なので、明確に書かれている箇所があるわけではないと思って解いてみるといいだろう。	やや難